

発行日 平成 27 年 04 月 10 日

民話のふるさと庄内町狩川

長南会通信 49 号でも紹介した、かたりべの長南一美さんが、東日本大震災の被災地を元気づけるためのユニークな活動をしている。一美さんは、山形県庄内町狩川の自宅を「ダシ風物語記念館」として開放し、さまざまな資料、写真、民芸品を展示している。また、かたりべとして、庄内地方の民話を独特の語り口で語り伝えている。昨年の 10 月、河北新報に一美さんの活動が掲載された記事を紹介します。

かっぱ夫婦？

南三陸へ新婚旅行

山形県庄内町の「太郎」と遠野市の「花子」のカッパ夫婦が、宮城県南三陸町で甘いハネムーンを満喫するそう。民話の語り手として知られる庄内町の農業長南一美さん（76）が 11 日、自作のカッパ像とともに東日本大震災の被災地を巡るユニークな旅を予定している。長南さんは「ユーモラスなカッパで南三陸の人たちを喜ばせたい」と張り切っている。

庄内町内を流れる最上川支流にはカッパ



狩川 長南一美さん

の「平吉」が住む伝承がある。2009年にカッパ淵^{ぶち}で有名な遠野市観光協会の協力を得て、遠野から嫁を迎えた設定で、長南さんが平吉夫婦と息子の太郎の像を制作し町内の公園に飾った。

平吉が「陸に上がりたい」「嫁さんがほしい」と夢に出てきたのが制作のきっかけ。親交のある遠野市の知人に話すと、とんとん拍子に縁談が進んだという。

昨年夏に遠野を訪問すると「そろそろ太郎にもお嫁さんを」と勧められた。今度も遠野生まれの花子を迎えることになり、ことし9月27日に新たにカッパ若夫婦の像を公開した。

長南さんは震災後の12年から南三



ダシ風物語記念館



花子と太郎

陸町の仮設住宅を訪問し、昔話を語るボランティアを続けてきた。太郎の結婚話が持ち上がったときから、完成したら南三陸の人たちにカップ夫婦を見せたいとの思いを抱いていた。

太郎と花子の像は、軽量セメント製で高さ60センチ。新婚

らしく太郎は胸に花を着け、花子はベールをかぶる。軽ワゴン車の後部荷台に金びょうぶを取り付けて2匹を並べ、訪問先で披露する。手作りのカップ開運証も用意し、見物人に贈る。

11日午前8時ごろに南三陸町に到着する予定で、「平成の森団地」や泊浜地区などの仮設住宅を回る。途中の道の駅でも車を止め、多くの人に見てもらおう予定とい

う。

長南さんは「特に子どもたちに見てもらい、少しでも喜んでくれればうれしい。庄内から南三陸までの道中でも多くの人に新婚の喜びを分けたい」と話している。

2014年10月09日（木） 河北新報ONLINE



先日、鶴岡市の長南成さんから、「爐」という表紙の小冊子が送られてきた。爐の会が発行している俳句集である。成さんによると、これまで長南年恵の研究会や般若寺での供養祭で、講師としてお招きした、畠山弘氏が代表で活動されている俳句の会だそうである。

この中に、長南年恵の生前を、これまでにないタッチで分析している記事があり、また、長南会の活動にも触れている所もあるので、成さんから、一族の皆さんに是非紹介してほしいとのコメントが同封されていた。

原稿には長南年恵→「おさみとしえ」とルビが振ってあるが、実際は「ちょうなん」である。なぜなら、鶴岡市周辺に、「おさなみ」「おさみ」と読む世帯は1軒もなく、全て「ちょうなん」である。当時、年恵の弟である雄吉が商売上「おさなみ」と称したので、裁判問題などで雄吉が表に立つようになると、年恵もそのように呼ばれたものと考えられる。

おさみとしえ 御嶽山と長南年恵 畠山 弘 鶴岡市

平成26年9月27日、長野と岐阜の県境に位置する御嶽山が突然噴火し、折からの休日とも重なって多くの登山者が捲きこまれ、かけがえのないいのちを失った。冬期を迎えて捜索が打ち切られた1ヶ月後の調べによれば、死者57名、不明者6名。この国の噴火による災害では最悪の結果を招いてしまった。噴火といってもマグマそのものではなく、水蒸気によるものであったが。

御嶽山には御嶽教の本拠、御嶽神社があり、むかしから庶民のこころのよりどころの霊場として、広く信仰を集めてきた。

この国の神道は、神社本庁の管轄する御社神道と、それぞれが独立する教派神道に分かれる。御嶽神社は教派神道に属し、



長南年恵

おおむなち
大己貴命を祭神としている。

東北の一隅、ここ山形県の鶴岡にも、江戸時代の末期の文久3年10月に生まれた長南年恵が明治期に行屋を構えて巫術を行っていたが、これが御嶽教の行者であった。ということは、明治40年10月に亡くなった折、葬祭場は長南家の菩提所般若寺であったが、葬儀そのものは僧侶ではなく、御嶽教の神官の手によって執り行なわれたという記録があり、このことから年恵が御嶽教所属の行者であったことをうかがわせるのだ。因に、



畠山弘氏 年恵勉強会にて 2004年 塔の腰

このとき御嶽教では年恵に大講義の位を贈っている。

長南年恵(戸籍によれば登志江)がいつどこでどのようにして巫術を身につけたのかは明らかでない。しかし、彼女が若いときから見せていた神がかり的な言動や摩訶不思議な霊力は、縁戚のものや信者らによって語り伝えられ一部は書き残されている。神仏のお告げを伝えるとか、占いがよく当たるとか、食事をとらなかつたとか、生理がなかつたとか。中できわだっているのが霊水引寄せ霊媒であり、いまもっての語りぐさ。大げさにいえばその筋では世界的に有名なのだ。

霊水引寄せ霊媒とはいったいどのような呪術であったのか。ひと口でいえば何もないところから水を引き出すというもの。いわば無から有を生ずるものであった。

たとえば、病人が空壇に名を書いた紙を貼り、あるいは代理人のこともあるが、行屋の祭壇に並べる。祈祷がはじまり、しばらくするといつのまにか壇の中に水が自然に満たされる。それも集まっている人々の目の前で。人為的なものではない。引き寄せられた水の色は量ともども違っていたし、それを飲んだ病人にはてきめん効いた。ただし、不治の病いを神仏に告げられる場合は壇に水が入らなかったという。

鶴岡警察では詐欺行為として一時拘束

したが、その間食事にはいっさい手をつけず、大小便の形跡もなく、蚊帳を差し入れても吊ろうとしなかった。ときは明治31年の夏の盛り。往時この地で蚊帳なしで夜を過ごすことなどできようはずもなかっただろうに。蚊は年恵を刺さなかったというのである。ほどなくうやむやのまま釈放された。先年民放のテレビ番組で年恵を取り上げていたが、もっぱら食事をとらぬことに話題をしぼっ

ていた。米や麦など食わずに生きている例はいくらでもある。だが、それやこれやの言い伝えは、年恵がよほど特異な体質の持主であったことを物語るものであらう。

その翌年から、年恵の弟が住む大阪に1年ほど滞在したときにも、世をあざむくものとして当局に拘留されたが釈放となった。このとき衆人監視の中で巫術を披露したことが当時の大阪毎日新聞に載っている。

自ら神変不可思議如来を気取る例の生神長南年恵も、末世なればにや、情なくも獄卒の手にかかり、大阪裁判所にて拘留10日の処分となりしを不服とし、所々に上告し回りし結果、大阪控訴院の宣告により神戸裁判所長中野岩栄、陪席判事野田又一郎、岸本市太郎、検事高木蔵吉、弁護士横山鉦太郎諸氏にてその公判を開きしが、証拠不十分なりとして無罪放免の身となれり。

これについて弁護士詰所に居合わせたる弁護士連が、とにかく彼女が神援と称する神水こそ世の不思議の限りなれば、試験を行うことこそよけれど、本人の生神に申し込みたるに、それこそ望むところなりと容易に承知したるにぞ。

まず同詰所の電話室を仮の試験所において、本人の衣服身体を十分に改めしはさらなり、電話室をも塵一つだに残らざるよう掃除せし上、いざとて生神に小壇を持たせたるままその中に閉じ込めしにて、何やらん呪文の如きを念唱する気配ありしが、僅か5分間にして裡より戸をコトコトとたたきつつ出て来るを見れば、不思議や携えたる小壇の中には濃黄色を帯びたる肉桂水の如きを一杯に盛りつつ静々と顯れ出でたり。生神のいうところによれば、ただに一本の壇のみならず幾10本たりとも3方の上へのせ、祈念一喝すれば、その壇の主なる病症に応じたる神水を天より贈るなりと厳かに語りたり。

その真偽は暫く措き、本人の身体及び室内をも眼前にあらしめたるに、5分間待たずして神水を盛りつつ顯れ出でたるはとにかく不思議なり。あるいは口中より吐きたるならんというものあれど、その液体は色こそ少しく茶色を帯びたれども、透明液にして口中より吐きたるものとは認め難く、さりとて神援など世にあるべしとも思われねば、さらに確かむることこそよけれど、弁護士中の好事家は日を期し、さらにその真相を極めんと、用意おさおさ怠りなしと聞く。 . . .

この巫術^{ふじゆつ}は往時の人々、ことに地元では畏怖の念をもって迎えられていたのだろう。神仏の加護を取次ぐものとして年恵を「極楽娘」と呼んだ。因に、彼女は終生独身であった。

筆者の子供の頃、年恵の行屋で引き寄せによる甘酒を馳走になったという信者の話を直接聞いた記憶がある。歳時記によれば甘酒は夏の季節なのだが、この地方では寒い冬の季節、ことに正月の飲み物として欠かせぬものであったから、その頃か。

卓袱台^{ちゃぶだい}を囲む人々の前にそれぞれ茶碗を並べ、年恵が呪文を唱えると、やがて茶碗が甘酒で満たされる。甘酒は実にくまかった、というのである。

また、これは直接聞いたのではなく伝えられている話なのだが、風呂桶に水を張り、年恵が居間から呪文をおくると、誰が薪を焚きつけたわけでもないのに、まもなく湯がふつつつと湧いたという。このての巫術のことを「おてかぎす」といった。

いま、年恵の存在とのかかわりを伝え

るのは、市内の南岳寺境内に建つ信者から寄進された御^{みたま}霊屋「淡嶋大明神」の名称にみる淡島信仰。同じ南岳寺に保管されている年恵が神おろしの際に使った神仏の名称を記す巻物からよみとれる湯殿山信仰。ここには湯殿山御沢仏と称する独特の土俗の神仏の名が書き連ねてある。因に南岳寺は湯殿山系の真言宗の寺で鉄竜海の即神仏を祀っている。それに菩提所般若寺での葬儀の折に贈られた「大講義」の名称による御嶽教とのつながり。書き残されたものとしては縁者や知り合いからの聞き書きを集めた千葉寛明の書留めを補足する渡部政三の『大講義長南年恵刀自集』（三版・昭和43年）のみ。内容は神がかりであり、断片的である。

当初は千葉県の柏市、いまは茨城県の阿見町に事務所を置いているが、長南姓の人々で組織する全国長南会があり、縁につながる有名人ということで長南年恵に関心を寄せ、筆者も招かれて2、3度話をする機会を与えてもらった。菩提所般若寺を会場に、供養を兼ねてのこともあった。その会でも話したのだが、もともと常識では、いや、人智でははかれぬところのある人、また来し方行方にもその巫術に似て謎の部分が多い。なにによらず真実の扉を開こうとするならば、資料を掘りおこしてそれをつなぎ合わせるしかない。たとえば.....



年恵の墓「大講義長南年恵刀自」般若寺

筆者の母は鶴岡の旧市と番田（ぼんでん稲生町）の間に架かる稲生橋のたもとにあった年恵の行屋をしばしば見ている。その話によれば、行屋の表戸は格子状に造られており、そこにはいろとりどりの布がびっしり吊り下げられ、中からは太鼓の音がいつも聞こえてきたという。このことから、格子戸の布は淡島行者が^{ぎょうこつ}行乞のときに持ちあるいていた法具と酷似して淡島信仰を裏付けている。また太鼓は、祈祷か神おろしの折かは定かではないにしても、湯殿山別当寺所属の真言修験の一世行人（巷では「おん行」と呼ばれた）のそれとよく似ているのだ。このあたりのことについて『大講義長南年恵刀自集』では何も触れられていない。ましてやこれをもとにつくりあげられた類書の殆どはオカルト趣味のはなしにすぎぬ。年恵の行屋は先年までその部屋が残っていたが取りこわされた。

年恵が終生の業とする巫術の方法を教わったのは誰だったのか。湯殿山は明治初年の神仏分離により羽黒山の管轄する神山にかわったが、その後昭和に入ってから神おろしの方法は伝えられていた。仏山時代の湯殿山は女人禁制であったことから行者は男性に限られ、ふだんは白い行衣で勧行のため家々を訪れており、ときには子供たちのいい遊び相手でもあった。明治に入って女人禁制が解かれてからは、神おろしを身につけようと所属の宗派を問わず入山修行をこころみる女性行者もあらわれ、会得しては巫術に携った例もある。教派神道実行教の女性行者もそのひとり



中村就一氏と畠山弘氏、掛け軸は年恵が書いたという書（鶴岡市般若寺にて2006年）

であったが、先年亡くなった。

長南年恵が身近な湯殿行者に教わったと考えられなくもない。筆者は湯殿系の最後の神おろしの行者でもあった酒田市海向寺住職の呪術をつぶさに見ている。実行教女性行者のそれもまた年恵の方法がどのようなものであったか。わずかに伝えられる、神おろしの折に妙なる楽（雅楽）の音が流れてくるという。そこところが湯殿系とは合致しない。あるいは他宗派のものが混じっていたのであったか。それも神道系の。太鼓を用いるという点では湯殿直系、傍系の実行教、年恵の3者の場合、一致する要素のように思える。

ともあれ、それにもまして解せぬのは年恵の霊水引寄せという呪術である。その水がどこから出て、どのようにしてもたらされるものなのか。いまでは見ることもできず当時の見聞の記録をもとに推測するしかないのだが。

いろいろな可能性を考えてみた。ときにはクロイドまで借用して。しかし、組み立ててみるしりから崩れてしまう。たとえるならば、この数式、たててもたてても出てくる答えは「解なし」ばかり。

マジックならばかならず種がある。江戸期に盛んだった水芸などそのからくりは解くまでもなく単純そのものだ。が、年恵の霊媒術は考えれば考えるほど謎は深ま

るいっぽうで、結論はおろか糸口さえ見つからぬままである。酒田市海向寺の星祭の折、東北大学のスタッフがその1部始終をフィルムにおさめていた。もちろん住職の神おろしの様子も含めて。御嶽教に巫術が伝えられており、映像ならずともそれらしい記録が残っていれば参考にはなったであろうに。

近年、長南会の人々が御嶽神社に直接ただしたところによれば、年恵とのつながりを示すものは何ひとつ見当らなかったという。くり返すようだが、この全体像の解明には、どんな小さなことでもいい、落穂拾いのようなたんねんな資料の収集によってのみ可能となる。接点は御嶽神社にばかりあるとは限らぬ。あるいは山内の片隅に埋もれていたり、周辺にちらばっているかもしれないのだ。

しかし、このたびの噴火である。往時とは一変してしまっただであろう山の様相は、なおのこと長南年恵と御嶽との関係をあいまいなものにし、遠ざけてしまったようである。

本稿は、『らくがき第5集』 に入れた同題の論考に、少々加筆したものであることを付記しておく。

消防団分団長で功績 長南賢一さんの受賞祝う 庄内町

昨秋の叙勲で瑞宝単光章（消防功労）を受けた元庄内町消防団分団長、長南賢一さん=山形県庄内町肝煎=の受賞祝賀会が29日、狩川公民館で開かれた。

約120人が出席。発起人を代表して原田真樹町長が「入団以来住民の財産を守ってくれた。長南さんと支え続けた妻光江さんの2人に送られたものだと思う。」とあいさつ。

田沢伸一県議、富樫透町議会議長らが祝辞を述べた。長南さんは「培った多くの経験をこれからも地域のために役立てていきたい。」と述べた。

長南さんは1973（昭和48）年に旧立川町消防団に入団し、庄内町消防団分団長を勤めるなどした。

3月30日 山形新聞



瑞宝単光章

祝辞を述べる長南賢一さんと妻光枝さん

苗字についての考察

江戸時代、苗字は帯刀とともに武士階級だけに与えられた特権であった。明治8年、明治政府によって、すべての国民が苗字を名乗ることを義務付けられた。そのため、平民は寺の住職や神主、知識階級の人などに、田んぼの中で「田中」、山のふもとで「山本」... と苗字をつけてもらった。と学校時代に先生から聞かされた人が多いはずだ。しかし、はたしてそうだろうか？

たしかに、江戸時代に苗字を名乗ることを許されたのは、武士階級と一握りの人だった。しかし、庶民も苗字を持っていることが普通であり、江戸幕府の政策により名乗ることが出来なかったというのが正解のようである。寺や神社への寄進帳などには農民の名前に苗字がついていることが多く、江戸時代より前の文献や石碑等には、苗字が記されているものが多い。明治新姓というのは種類が多いかもしれないが、長い間苗字を使わなかったために、わからなくなった一握りの人たちが作ったのだろう。その証拠に、大半の苗字は全国的に広く分布されているということで解る。したがって、日本人全体からすると、一部の武士階級などにしか苗字はなく、明治以降新姓が作られた、あるいは用いられたということは誤解と言えるかもしれない。

日本の苗字は地名との関係が密接であるという。しかし、その土地に地名と同じ名字が多いとは言えない。ご存じの例が「長南」姓であり、また、三浦、千葉などは関東地方の地名だが、全国的に多く、むしろ東北地方に多い苗字だと思う。これは、群雄割拠の時代に、さまざまな事情があって一族で荘園を離れざるを得なかったのだろう。長南氏と同様に、歴史をさかのぼると新たな真実がわかるかもしれない。

世界的には、個人名の他に苗字を持つ

民族は少ないそうだ。苗字のない国で個人を識別するのは親の名前だったりする。ジョンソン（ジョンの息子）やロバーツ（ロバート家の人）などはそんなところから発祥したものだろうか。

中国や韓国はほとんどが1字漢字の姓（金、朴、呉等...）である。もっとも愛新覚羅という清王朝を起こした家系があるが、これは満州語で、漢語に訳すと金氏の一族と云う意味で、清朝滅亡後は「金」姓に取り換えたという説がある。中国、韓国は1文字姓のため、同姓同名が多いだろうと思われる。それに比べ、日本は2文字姓が多く3文字姓、4文字姓も少なくない。そのため苗字の種類が多く、約10万種ほどあるという。漢字文化圏の中で、日本は例外的に苗字の種類が多いとされているが、その点日本の方が個人を識別しやすいかもしれない。

珍苗字さん

苗字で「小鳥遊」と書いて何と読む？
.....「たかなし」と読みます。

この苗字を見たときは、冗談かなと思ったが、調べてみると、実在する苗字である。天敵の鷹がいないと小鳥は自由に遊べるのでこう読ませるのだろうが、ものすごい当て字で文字遊びのようである。信濃国高梨邑を領した高梨氏が、長男に高梨、次男に鳥楽（たかなし）、三男に小鳥遊、などの姓を与えたというが、都合良く苗字の読みを変えないで分家したのだろうか。

他にも色々ある。

四月一日：衣替え綿を抜く、わたぬき。

五月七日：梅雨にはいる、つゆり。

八月一日：稲の穂を積む季節、ほづみ。

月見里：山がないと月が見える、やまなし。

一：二の前だから、にのまえ

九：九が一字だから、いちじく

十：木の枝がもげたら、もげき、もぎき
青宿 秀則

訃報 4月2日、山形県庄内町の長南寿一さんが逝去されました。歴史研究者として、全国長南会の活動に積極的に参加していただきました。昨年鶴岡市での「庄内のつどい」では新たな幕末の歴史のお話をされるなどしていただきました。ご生前を偲び謹んでご冥福をお祈りいたします。

会計報告

2014/01～2014/12

内 訳

	入金	出金
前年度残高	541,441	
会費	258,000	
利息	119	
寒風沢墓管理費用		20,000
紅花まつり協賛		20,000
46号発行代		20,885
47号発行代		12,819
48号発行代		21,892
49号発行代		22,634
取材費		55,625
香典		30,000
事務用品費		19,601
通信費		4,524
振込手数料		6,000
合計	799,560	233,980
今年度繰越金		565,580

現金	51,578
普通預金	495,392
当座預金	18,610
合計	565,580

東京蒲田で会社を経営する齋藤武夫さんは、寒風沢島の和泉守のお墓の管理費として、毎年寒風沢にご寄付を送っていただいています。

寒風沢の和泉守と36士のお墓は潮陽館の昭子さんがお守りしています。齋藤武夫さんは中村就一さんの先妻、房江さんの出自の家で、ご先祖は寒風沢から来た長南平七の家系であり、長南会発足時より、資金面ではもちろん、会の運営に多大なご協力をいただいております。

早々と会費納入ありがとうございます。

山形県庄内町	長南賢一	10,000円	2015/01/13
茨城県青宿	長南照光	12,000円	2015/01/18
東京都蒲田	齋藤武夫	22,000円	2015/02/09

平成27年度 年会費納入のお願い

振替用紙を同封しますので、年会費1口2,000円をお振り込みください。

郵便局のキャッシュカードをお持ちの方は、振替用紙を使用しないでATMから次の口座にお振り込みください。

全国長南会 記号 10650 番号 13085711

ATMからだど、手数料（会負担）が無料になります。

全国長南会の運営のため、ご協力お願いします。